

Newsletter No. 16

Maxillofacial Prosthetics

発行人 石上友彦

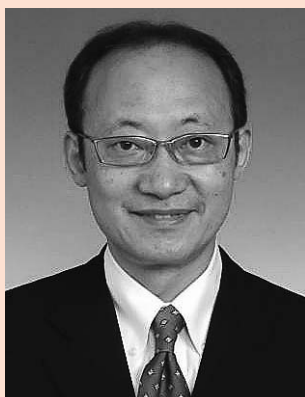
編集 広報委員会

事務局 〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

Tel : 03-5620-1953 Fax : 03-5620-1960

E-mail : max-service@onebridge.co.jp

第 30 回学術大会案内



大会長 山森 徹雄
(奥羽大学)

会期：平成 25 年 6 月 21 日(金), 6 月 22 日(土)

会場：市民交流プラザ(ビッグアイ 7 階)

〒963-8002 福島県郡山市駅前二丁目11番1号

電話：024-932-9304(準備委員会)

第 30 回学術大会という節目の大会を当講座が担当させていただくこととなり、光栄に存じております。

今回の特別講演には奥羽大学口腔外科学講座の高田 訓先生を講師に迎え、「末梢神経損傷部への嗅神経鞘細胞移植の有用性」と題する講演を予定しています。また小野高裕先生に座長を担当い

ただき、「舌接触補助床の真髄を探る」シンポジウムを企画いたしました。近年、広範に用いられるようになった舌接触補助床について、ご講演ならびにディスカッションを通して専門学会といえる本学会の提言が示されるものと期待しております。また、本大会と併催される第 18 回教育研修会が学術委員会によって準備され、周術期口腔管理と広範囲顎骨支持型補綴というホットな、そして本学会会員が密接に関係する話題が取り上げられています。実り多い研修会になるものと確信しております。さらに、学術大会初日の夕方には、恒例の会員懇親会を予定しております。

本大会の担当を仰せつかった翌月に発生した東日本大震災に際しましては、本学会会員各位より物心両面にわたるご支援をいただき、誠にありがとうございました。郡山での開催が危ぶまれた時期もありましたが、インフラや建造物の復旧、環境の安定化が順調に進行し、皆様をお迎えできる状況が整っております。清野和夫大会長のもとで開催された第 17 回大会以来の郡山での大会となりますが、松村奈美準備委員長を中心として鋭意準備を進めております。是非、お越しくださいますようご案内申し上げます。会員各位による熱いディスカッションと洗練された会話により、これからの顎顔面補綴を推進するための 2 日間としていただければ幸いです。



JR 郡山駅に隣接するビッグアイ（写真左側）。7 階の市民交流プラザが学会会場。

第 29 回学術大会

平成 24 年 6 月 15 日（金）、16 日（土）、愛知学院大学楠元講堂において、田中貴信大会長（愛知学院大学）のもと、第 29 回日本顎顔面補綴学会学術大会が開催された。

大会初日には特別講演、シンポジウム、一般口演 21 題および認定医ケースプレゼンテーション 1 題があり、2 日目には第 17 回教育研修会と一般口演 20 題の発表があった。

一般口演数は前回大会よりもさらに増え、若い先生方の参加が目立った大会であった。

特 別 講 演

「機能および整容面の維持を考慮した頭



頸部再建」

兵藤伊久夫先生

愛知県がんセンター
中央病院形成外科

近年、抗癌剤の開発、IMRT による放射線治療などによって頭頸部腫瘍患者の予後の改善に伴い、腫瘍の治療後の QOL および機能に対する取り組みも重要になっている。本特別講演では、形成外科医のお立場から機能および整容面の維持を考慮した再建についてのご講演頂いた。

講演は、舌再建、下顎骨再建、上顎再建についての各論とともに、頭頸部腫瘍患者に対する包括的治療についてご見解を述べられた。その中で特に興味深かったのは、上顎欠損に対する皮弁再建の是非についてであった。議論の余地はあると前置きされていたが、皮弁再建の適応症例として頭蓋底手術症例、顎義歯装着困難症例、患者の年齢、背景などの相対的適応をあげられた。また再発の診断の遅れの懸念については、画像診断等の診断能力の向上により皮弁再建症例と非再建症例での相違はなく、経口摂取再開までの日数にも差は認められないとのことであった。腫瘍の予後が期待できないような症例や高齢者などで自身による顎義歯の装着が困難な症例は、自宅で安定した生活のために皮弁再建のメリットがあるとのことである。

もちろん、再建手術のみでは完全な機能回復が得られなく、顎補綴による機能回復が必要な症例は多く、再建手術と顎補綴治療のコラボレーションが理想であり、このような治療を行える施設が増すことを希望されていた。さらに顎補綴医も含めた癌治療に携わる者は、多職種間でお互いの立場で行える治療の限界を知り、患者の情報、患者の主訴をくみ上げ各患者に応じて適切な治療を選択することが重要であるとまとめられた。

（広報委員 中島純子）

シンポジウム

「顎顔面補綴におけるデジタルテクノロジー」



大会 1 日目の午後には奥羽大学山森徹雄教授の

コーディネーターのもと、シンポジウム「顎顔面におけるデジタルテクノロジー」が開催された。昨今の技術の進歩の結果、医用工学分野においてもデジタルテクノロジーの応用が進んでいる。今回のシンポジウムでは様々な分野から4人の先生方に講演をしていただいた。

まず、東京工科大学デザイン学部の板宮朋基先生に「超軽量医用3Dモデル作成技術の臨床と教育への応用」との題で、新たな3Dモデルデータフォーマットの応用についてお聞かせいただいた。一般的にCTなどで用いられるDICOM形式のデータをXVL形式という新たに開発されたフォーマットに変換することで精度を保ったまま軽量化できる。我々の分野である頭蓋骨のデータは平均で18.9%に圧縮できるとのことであった。この技術を生かし、ネットワーク経由で同じ3Dモデルを見ながらの遠隔症例検討会議の様子は、将来の他施設連携を期待させるものであった。

東京医科歯科大学顎顔面外科学分野の黒原一人先生には「顎骨再建におけるデジタルテクノロジー」との題で3DCTデータを利用した再建術についてお話しいただいた。3Dモデルデータによる手術シミュレーションやモデルサージェリーなど最先端の再建治療についてご説明いただいた。

続いて北海道大学病院生体技工部の西川圭吾先生が歯科技工士の立場から「エピテーゼ製作におけるデジタル技術の有用性と今後の展望」との講演をされた。旧来のアナログ方式による方法とデジタル技術を用いた手法を対比しながらの講演は非常にわかりやすいものであった。

最後に愛知学院大学有床義歯学講座の吉岡文先生に「エピテーゼ製作におけるデジタルテクノロジーの活用」として、3次元計測装置や3Dプリンターの特徴を、データを示しながら実際の症例提示も交えてご説明いただいた。現状の問題点や今後の展望についても述べられた。

4人のシンポジストが共通して挙げたネットワークを介した他施設との連携は、近い将来応用でき、特殊な診療である顔面補綴治療をどこでも受けることでできると期待される。一方で、最終的な調整はやはり経験のある術者が必要なこと、エ

ピテーゼの着色についてはまだ難しいといった問題点も挙げられた。フロアからも活発な質疑が行われ、特に材料について簡便性や着色性など、それぞれの立場からの課題が提起されたのは興味深く、改めて様々な分野を交えて共同研究を行っていく必要性が感じられた。

(広報委員 堀 一浩)

第17回教育研修

「多施設研究に（を）学ぶ」を開催して

座長 関谷秀樹



従来の教育研修会と趣を変えた内容でしたが、診療ガイドライン作成の過程を経て、法人化へ向けた準備をしている本学会員のほとんどの先生方は、このテーマに関し違和感を覚えなかったのは企画側として、とても安堵いたしました。

今回の教育研修会では、今後本学会が「多施設研究」をもとにエビデンスを高めつつガイドラインを改訂していく際に留意すべき点を、抄録の講演順を変更して、平田創一郎先生からご助言いただきました。さらに「多施設研究」の企画と実施に関わられた篠原正徳先生（口腔外科学）、會田英紀先生（歯科補綴学：演者変更）、秀島雅之先生（歯科補綴学）から、それぞれの領域で立ち上げられた「多施設研究」についてご紹介いただく内容となり、より分かりやすく工夫された講演となりました。また、質疑も活発に行われ、会員の先生方の多施設研究へ向けてのきっかけづくりとして効果的であったように感じました。

講演終了後にこの研修会についてのご感想などを伺ってみました。やはり少数の先生方からは、

研修会の趣旨がわかりにくく、なぜ補綴学会のプロトコルや欠損分類が供覧されるのか、というご指摘もありましたが、多施設研究に重要な共通プロトコルの整備から着手し、苦悩しながらもその成果を挙げている補綴学会の事例を具体的にお示しして、会場の先生方にその方法論を理解していただく試みであることを説明させていただきご理解を得ました。しかし、本学会の牽引的立場の先生方からは、良かったという声も聞かれ、胸をなで下ろし会場を後にしました。

(広報委員 関谷秀樹)



関連学会報告

第17回・第18回共催 日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会

2012年8月31日(金)、9月1日(土)の2日間、「摂食・嚥下リハビリテーション 一夢を語り、未来を描く」をテーマに、札幌市にて第17回・第18回共催 日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会が行われました。第17回大会は昨年9月に開催されるはずでしたが、東日本大震災の事故のため中止となり、今回第18回大会と共催という形で開催されました。学会当日は、摂食・嚥下リハビリテーションに携わる多職種の参加者が4300名以上参加し、活発な討論が行われました。演題数も780題余と大変な盛況ぶりでした。内容は基礎から診断・臨床、小児から高齢者と幅広く、このことから現在多くの症例で摂食・嚥下リハビリテーションが必要とされており、多くの人の

材と研究が必要とされていることが伺えました。

頭頸部腫瘍に関わる演題は、学会助成課題成果報告講演と一般演題で約30題でした。頭頸部腫瘍と言っても様々ですが、術後の機能回復が非常に困難な舌亜全摘症例に関わる内容が多く、リハビリテーションの介入時期や訓練内容、嚥下直接訓練の開始時期、評価・診断、PAP使用時の効果、食支援の模索等、多くのテーマが抽出されていました。術野が広く、放射線治療や化学療法を併用し侵襲が大きくなると、予後・合併症の予測が把握しにくく、術後のQOL向上が難しくなる場合があります。このことから、術前の嚥下機能評価と摂食・嚥下リハビリテーションの早期介入により術後の治療目標設定を具体的にとらえることの有用性が挙げられていました。また、手術内容によらず積極的なリハビリテーションを行うことで退院時の栄養獲得状況には症例間でほとんど差が無くなることや、定期的な評価と訓練で合併症の減少と入院期間の短縮が可能であること等、日々の臨床を勇気づけてくれる内容が多いように感じました。しかし、報告の多くは急性期から安定期・維持期における介入であり、その後の慢性期に関してはほとんどとりあげられていませんでした。病院という恵まれた環境では取り上げられなかった問題が、退院後大きな問題になることはよくあります。他施設への転院されるようなケースでは、情報を共有し理解しあうことが重要とされました。今後もさらに多くの情報共有と発展の場になる学会であることを期待します。

(広報委員 堀 一浩)

2nd Congress, European Society for Swallowing Disorders (ESSD)

2012年10月25日～27日の3日間、スペインのバルセロナにて2nd Congress, European Society for Swallowing Disorders (ESSD)が開催されました。European Study Group for Dysphagiaが前身の本学会は、北米に比べて遅れをとっていたヨーロッパでの嚥下障害に関する臨床、研究の活性化を目的に設立された新しい学会です。現在、学会員数は25か国、157名であり、会員

の主な国籍はフランス、スペイン、ベルギー、イタリア、ドイツ、英国ですが、米国、ブラジル、オーストラリアなどヨーロッパ圏外の会員も15%在籍しています。

今回の大会は、Uniting Europe Against Dysphagia をメインテーマに掲げ、23 か国から300名を超す参加者が集い、口演41題、Mini Oral presentation 20題、ポスター発表105題とDysphagia Research Society に引けを取らない盛会となりました。診断、評価、訓練方法、栄養、小児、高齢者、脳梗塞、その他（頭頸部腫瘍術後患者など）等のセッションが設けられ、セッションの口演発表終了後には各セッションのテーマについてのPosition Statement が会場を交えた議論により修正・決定されていたのが印象的でした。

本邦からは口演2題、mini oral 2題、ポスター発表5題の参加がありました。JAMP（日本顎顔面補綴学会）のメンバーの大阪大学・藤原茂弘先生の2種の努力嚥下時における舌圧の発現様式の相違に関する口演は、ユーモアあふれるスライドに会場は大いに盛り上がり、内容も非常に高い評価を得られ、大阪の笑いのセンスとJAMPの研究レベルの高さをヨーロッパに印象づけました。



次回は、2013年9月12日～14日にスウェーデンのマルメで開催が予定されています。

（広報委員 中島純子）

第14回日本顎顔面技工研究会学術大会

第14回日本顎顔面技工研究会学術大会が、平成24年11月3日（土）に庄野紀代美先生（金沢医科大学病院技術部）を大会長として金沢医科大学病院で開催された。今回の大会テーマは、技術は人のために「口腔顎顔面医療におけるチームアプローチ」で、特別講演、宿題講演、シンポジウムと一般口演13演題で、総参加者は116名であった。

特別講演は「頭部・顔面・口腔の形態異常と遺伝性疾患」というテーマで新井田要先生（金沢医科大学病院・遺伝子医療センター長）が、口唇口蓋裂など頻度の高い外表奇形を発生学的成因と多因子遺伝性疾患の観点から事例を以て講演された。

宿題講演は、「北海道大学病院における顎顔面補綴の変遷 ―医科との連携を主体として―」というテーマで西川圭吾先生（北海道大学病院生体技術部）が、10年間の耳鼻科、内科、泌尿器科からの多種多様な製作依頼とその解説、総合病院における歯科技工技術の可能性と歯科技工士の将来展望について講演された。

シンポジウムは、『口腔顎顔面医療におけるチームアプローチの現状と未来』というテーマで、以下の講演があった。

陶山日出美先生（久留米大学病院）は、「歯科口腔技工の補綴系技工と治療系技工」と題して、補綴系技工では顎義歯、エピテーゼ、治療系技工で

は骨折整復固定装置、嚢胞摘出後の栓塞子、PAP、PLP、OSAS、カスティロモラレス床について講演された。

井駒由利子先生（金沢医科大学病院・口腔衛生チーム）は「口腔外科領域における歯科衛生士の役割」というテーマで、当院の口腔外科、矯正歯科、有病者歯科等で行っている業務でのチームアプローチについて講演された。

経田香織先生（同・リハビリテーションチーム）は「補綴装置が構音と嚥下機能に及ぼす効果」と題し、PAP や PLP について講演された。

佐渡忠司先生（佐渡歯科クリニック）は、「チームアプローチは誰のためにあるのか 一大学・病院歯科・歯科診療所の視点から」と題し、大学病院、地域基幹病院、一般診療所でチーム医療を行う際の問題点について講演された。

一般口演では、顎義歯、OSAS、放射線治療、東日本大震災報告、市民公開講座、北欧の技工士制度、エピテーゼ、分離型義歯、乳輪プロテーゼ、腔ダイメーター、医療連携など多岐に亘った症例や研究について語られた。今回、大会テーマにチームアプローチという言葉が含まれていたため、一般口演にも他科連携に関するものが多かった。

次期大会は奈良市の奈良県文化会館で、畠中利英先生（奈良県立医科大学附属病院）を大会長として来年 11 月 30 日に開催予定である。

（広報委員 山口能正）



10th Biennial Meeting of the International Society for Maxillofacial Rehabilitation

2012 年 10 月 27 日～ 30 日に米国ボルチモアで開催予定だった 10th Biennial Meeting of the

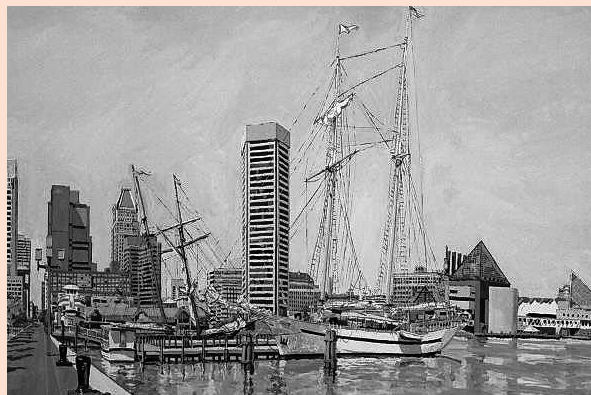
International Society for Maxillofacial Rehabilitation は、ハリケーン「サンディ」東海岸直撃のために、残念ながら開催中止となった。学会から中止の連絡があったのは現地時間 26 日夜だったので、すでに多くの JAMP 会員が現地に到着していた。

27 日午前中、ボルチモアは晴天で雨が降るでも風が強いわけでもなかったのに、最も近い空港である BWI 発の米国国内線がほぼ満席で予約困難という情報を聞き、さすがに焦った。

結局、レーガン・ナショナル空港（DCA）発の便しか取れず、Amtrak（鉄道）と地下鉄を乗り継いで行った。さらに遠いダレス空港発の便になった先生方もいらっしゃったことを、後日聞いた。

どうにか無事に日本に帰国した後、報道でこのハリケーンによる被害の凄まじさをみて、ISMRR 理事会の学会中止という英断に心から感謝した次第である。

（広報委員長 松山美和）



関連学会の案内（平成 25 年）

●第 30 回日本口腔インプラント学会九州支部学術大会

日 程：1 月 19 日（土）～ 20 日（日）

会 長：阿部成善

（あべ歯科インプラントクリニック）

会 場：別府ビーコンプラザ

問合せ：〒 874-0828

大分県別府市山の手町 12-1

ビーコンプラザ内

（株）コンベンションリンケージ

TEL：0977-27-0318 FAX：0977-26-7100

●第31回日本腫瘍学会総会・学術大会

日 程：1月24日（木）～25日（金）

会 長：柴原孝彦（東歯大）

会 場：秋葉原コンベンションホール

問合せ：〒261-8502

千葉市美浜区真砂 1-2-2

東歯大・口腔外科学講座

TEL：043-270-3973 FAX：043-270-3979

●第23回日本頭頸部外科学会総会・学術大会

日 程：1月24日（木）～25日（金）

会 長：黒野祐一（鹿児島大）

会 場：城山観光ホテル

問合せ：〒135-0033

江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷株式会社

TEL：03-5620-1953 FAX：03-5620-1960

●第32回日本口腔インプラント学会関東・甲信越支部学術大会

日 程：2月10日（日）～2月11日（土）

会 長：築瀬武史（日本歯科先端技術研究所）

会 場：京王プラザホテル

問合せ：〒102-0075

東京都千代田区三番町 2 三番町 KS ビル
3F

(株)コンベンションリンケージ

TEL：03-3263-8688 FAX：03-3563-8693

●第67回日本口腔科学会学術集会

日 程：5月23日（木）～24日（金）

会 長：今井 裕（獨協医大）

会 場：栃木県総合文化センター

問合せ：〒0321-0293

栃木県下都賀郡壬生町北小林 880

獨協医大 口腔外科学講座

TEL：0282-86-1111

●第37回日本口蓋裂学会学術集会

日 程：5月30日（木）～5月31日（金）

会 長：後藤昌昭（佐賀大）

会 場：佐賀市文化会館

問合せ：〒849-8501

佐賀市鍋島 5-1-1

佐賀大・医 歯科口腔外科学講座

TEL：0952-31-6511

●第54回日本歯科放射線学会

日 程：6月1日（土）、2日（日）

会 長：湯浅賢治

会 場：ももちパレス（福岡市）

問合せ：〒814-0193

福岡市早良区田村 2-15-1

福岡歯大 診断・全身管理学講座画像
診断学

TEL：092-801-0411

●第43回日本口腔インプラント学会学術大会

日 程：9月13日（金）～15日（日）

会 長：古谷野 潔

会 場：福岡国際会議場

福岡サンパレスホテル&ホール

問合せ：〒812-8582

福岡市東区馬出 3-1-1

九州大学大学院歯学研究院

口腔機能修復学講座

インプラント・義歯補綴学分野

TEL：092-642-6441 FAX：092-642-6380

●第24回日本咀嚼学会学術大会

日 程：10月5日（土）～6日（日）

会 長：山田好秋

会 場：新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」

問合せ：〒951-8514

新潟市学校町 2-5274

新潟大学大学院医歯学総合研究科

摂食環境制御学講座

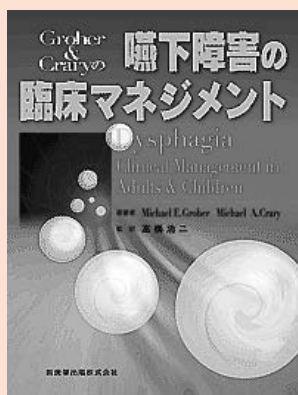
口腔生理学分野

TEL：025-227-2824 FAX：025-225-0281

Newsletter No. 16

Maxillofacial Prosthetics

書籍紹介



Groher & Crary の嚥下障害の臨床マネジメント

(医歯薬出版)

定価 11,000 円

摂食・嚥下障害臨床に携わる方すべてのために作られた書籍で 2010 年原書出版, 2011 年 11 月 25 日出版の翻訳本です。この翻訳プロジェクトは、監修者である高橋浩二先生（昭和大学歯学部口腔リハビリテーション医学講座教授）の呼びかけで「のもう会：歯科医師の摂食嚥下を考える会」の幹事メンバーを中心に、翻訳が 2 年前に始まりました。それぞれに訳者は半年間をかけ、交流のある専門各分野の医師・言語聴覚士と相談しながら、自身の専門的経験を交え、訳者注を付けながら丁寧に翻訳し、訳者相互の十分な監修を経て完成した待望の「臨床摂食・嚥下障害学」の教科書となりうる本です。

顎顔面補綴関係者では、第 2 章：成人の正常嚥下を舘村先生、第 7 章：食道の嚥下障害を関谷、第 12 章：治療上考慮すべき点を吉田先生が翻訳しています。

最新のリハビリテーション法から古典的背景まで、ただ読んでいてだけで、のめり込んでしまう

ような現場の臨場感がある内容で、各所に臨床的エピソードが盛り込んであります。しかし、言語聴覚士国家試験要項を十分にカバーした内容で、私の担当する茅ヶ崎リハビリテーション専門学校言語聴覚士学科での嚥下障害学の講義に早速使っております。手前みそですが、是非、各科に 1 冊御配備ください。

(広報委員 関谷秀樹)

コンテンツ

第 30 回学術大会案内	1
第 29 回学術大会報告	2
関連学会報告	4
関連学会のご案内	6
書籍案内	8

・皆様のご意見をお寄せください。

日本顎顔面補綴学会広報委員会

委員長 松山美和

委員 関谷秀樹, 堀 一浩, 中島純子
山口能正

TEL : 088-633-9213, FAX : 088-633-7898

E-mail : miwa.matsuyama@tokushima-u.ac.jp

〒 770-8504 徳島市蔵本町 3-18-15

徳島大学大学院ヘルスパイオサイエンス研究部